

(一) 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

この文章では、人間と人間以外の存在者の関係を私たちはいかに捉えうるのかという問いを、人間以外の存在者⇨人間の範例である「動物」と「機械」に焦点をあてながら探求する。人間に近い動物たるチンパンジーや鯨、人間に近い機械たるロボットや人工知能(AI)は、いずれも学問的探求と社会的関心の大きな焦点となってきた。これらの非人間と人間の関係性をそもそも私たちはいかなるものとして考えることができるのか。

動物、人間、機械の位置づけは混^aメ^aイを極めている。その証拠に、私たちはこの三項において等号と不等号の相互に矛盾する組み合わせを想定できる。例えば、近年「技術的特異点(Technological Singularity)」という概念と共に普及した「あらゆる知的能力において人間を凌駕する知能機械がいずれ現れる」という未来予測は、知的活動における機械と人間の同質性を前提とするが、知性の頂点をめぐって機械と人間がせめぎあう近未来の見取り図に動物が参与することはない(A)。一方、近代的思考の端緒となった機械論哲学においては、外部から与えられた規則に従ってふるまうという点で動物と機械の同質性が指定され、理性的な人間精神がそれらの外部に位置づけられる(B)と同時に、人間の身体と動物のあいだに同質性が指定される(人間⇨動物)。対して、エドワード・ヴィヴェイロス・デ・カストロが論じる南米の「バースペクティヴィズム」など、多くの非近代社会に見られる発想において人間と動物は「自己」や「魂」をもつ点で同質とされる一方で、道具や機械にそれらの特性が認められることは稀である(C)。全ての関係を一挙に表せば「機械⇨人間⇨動物⇨機械⇨人間⇨動物⇨機械」となり、三者から取り出される全ての二者関係に等号と不等号が適用されることになる。

動物・人間・機械という三項の比較は、比較を行う主体としての私たち人間が比較される客体でもあるという再帰性において特徴づけられる。どんなに客観的に三者の比較を行っているように見えても、そこには私たち⇨人間における動物や機械との具体的な関係性が影響を及ぼしており、比較される対象同士の相互作用の変化に伴って比較のありかた自体が変容してしまう。私たちにとって、動物・人間・機械の関係性は常に(D)であると同時に(E)である。外側から三者を眺めることが可能であるように見なされる一方で、私たちは常に自ら比較の対象でもあるものとして残りの二者と相互に作用しあっている。以下では、動物・人間・機械という三項の関係を、(D)／(E)な観点の併存に注目しながら考察していく。

まずは、動物・人間・機械をめぐる近代的思考の端緒となったデカルトの機械論哲学(動物⇨機械説)について検討しよう。教科書的な説明において「デカルトは、動物や人間の身体を時計などの機械と類比的なものを見なすことで、諸存在は固有の目的や形相を実現する本性をもつとするアリストテレス自然学を否定し、機械と同じく客観的な法則に従うものとして自然現象を把握し解明する近代自然科学の基盤を築いた」とされる。こうした一般的な説明において、デカルトの議論は、機械と生物という比較対象の外部から人間(デカルト)が行った客観的な比較として提示される。一方、動物を含む諸存在の運動の原理をそれらをもつ霊魂や欲望によって説明するアリストテレス自然学は、自然界の現象を擬人化したものであり、分析されるもの(自然)に分析するもの(人間)が誤って投影された、客観的でない主張として提示される。

これに対して、デカルトの動物⇨機械説もまた、ある種の擬人化の産物として捉えられることを示したのがジョルジュ・カンギレムである。彼はまず、有機体と機械の間に類比性を見いだすデカルトの議論が、柱時計や懐中時計、水車、人工噴水、パイプオルガンといった十七世紀当時の先端技術に依拠していることに注目する。これらの機械は、(F)といった人間の運動と密接に結び付いた旧来の技術に比べて、それらが円滑に作動しているときには人間の関与なしに自動的に動いているように見え、その限りにおいて自律的に動きまわる動物や人間身体と類比的な存在として現れる。だが同時に、これらの機械はその動力を——(F)ほど明示的ではないが——人間の働きに頼っており、特定の目的のために人間によって作られるものに他ならない。機械は、表面的には単体で作動するが、背後では、動力や目的や形態を機械に与える人間と常に結びついているという二重性をもつ。

動物⇨機械説は、機械の二重性を自然の事物に重ね合わせることで構成される。では、自然の事物において「機械を制作し動力や目的を与える人間」に対応するものは何か。一六六二年に出版された『人間論』の冒頭でデカルトは次のように述べている。「身体とは、できうるかぎりわれわれに類似したものにするために神がまったく意図的に形づくった土でできた像または機械以外の何ものでもない、と私は想定する」。この記述に基づいて、カンギレムは、動物⇨機

械説は次の二つの条件が満たされて初めて意味をなす主張であると言う。それは第一に、動物⇨機械（「身体」）を制作するものとして神が存在することであり、第二に、機械の制作に先立って生体がイデアとして与えられていることである。動物⇨機械は、動力因としての神と形相因かつ目的因としての模倣すべき生体が先在して初めて生じる。

このように、動物⇨機械説とは、神による自然の制作を人間による機械の制作に擬えて把握するという概念操作の産物であり、アリストテレス自然学とは異なる擬人化の形式をなす。ここでは、アリストテレスの目的論的な生命理解が放棄されているのではなく、目的論の位置がずらされているのだ。個々の生物の内部に設定されていた諸要因は神がそれを模倣して身体を作る生体のイデアおよび動力因としての神へと転置され、自然のうちにある合目的性が除去されることで、動物や人間身体をはじめとする自然物はそれに固有の目的や靈魂を奪い取られ客観的な規則に従う存在⇨機械として把握される。こうした理論上の「生命の機械化」を通じて、自然物や動物の技術的な利用が正当化される。カンギレムは、この発想が西欧人の典型的な姿勢の前提をなすと指摘した上で、それを次のように定式化する。

人間は、いかなる自然的な合目的性をも否定する場合にのみ、また、一見して靈魂を有するように見える自然を含めて、自己自身の外にある自然全体を手段とみなすことができる場合にのみ、自分を自然の主人にして所有者とすることができるのである。

デカルトの動物⇨機械説は、その一般的な理解に反して、対象（動物・機械・人間）を外外部から分析者（人間）が客観的に分析するような外在的な比較とは言い切れない。機械に関してはその製作者として、生物に関してはその一部として、人間（比較するもの）は比較される対象に内在している。だが同時に、デカルトの議論はこうした比較の内在性を捨象することで成立している。まず、機械に特定の目的や形態や動力を与える製作者たる人間の存在が捨象されることで、客観的な規則に従って自律的に動作する機械の姿が得られる。そうした機械と類比的な存在として生物一般を捉えることで、目的因・形相因・動力因が生物の内部からシユウ奪され、製作者としての神へと移動する。そして、信仰と理性を通じた神との関係を通じて、人間の半身（「人間精神」）が生物の属する自然界から抜け出し、「自然の主人にして所有者」としての地位を獲得する。

端的に言って機械論哲学は、生命を機械と比較し、その余剰（「動物⇨機械」ではないもの）として近代的な「人間」を浮かび上がらせる仕掛けである。人間の圏域（「文化」や「社会」）を自然の圏域から峻別することを可能にした点で、デカルトの行った概念操作はラトウールの言う近代的な「純化」の端緒をなすものであるとも言えよう。自然の圏域から切り離され「純化」されることで、人間は自然を客観的に分析しうる地位を得る。したがって、前述した教科書的な説明において自明視される「動物・人間・機械を外在的に比較する人間」とは、実際にはデカルトの議論の帰結として現れるものであり、議論の帰結を前提に置き換えることでデカルトが行った比較の内在性は不可視化されてきたのである。

周知の通り、動物⇨機械説における概念操作は二元論的な人間の分節化を導く。諸要因を欠いた動物⇨機械の一種としての身体（延長）と、それらを手段として利用できる理性的な意志と判断能力を備えた精神（思惟）という区分が、人間の領域に導入される。クロード・レヴィ・ストロースが論じたように、人類学の古典的な分析対象であるトーテム信仰が、環境に生息する種々の存在者たちとの関わりを媒介として自然種間の示唆的格差と人間集団間の示唆的格差のあいだに相同性を仮設することによって自然の体系に頼りながら人間社会の体系を確立しようとする営為であるならば、機械論哲学とは、環境に配備された様々な機械との関わりを媒介として自然のうちにある分節（自然種／神）と人間のうちにある分節（延長／思惟）の間に相同性を仮設することによって自然の体系を解析し利用し所有しうる人間の主体を構成する試みであると言えるだろう。非近代社会における「動物のトーテミズム」に対して、機械論哲学は近代社会における「機械のトーテミズム」を確立する基盤となったのである。

両者のいずれにおいても、相同性は発見されるのではなく仮設される。トーテミズムにおいて社会集団間の差異はあらかじめ存在するのではなく、自然種同士の差異に擬えられることで生み出される。ダン・スペルベルが論じたように、「集団は社会的差異を表現しようとするのではなく、むしろ、それらを創出し、強化しようとするのだ。」「身体（延長）／精神（思惟）」という区分についても、より厄介なのは、両者がいかに結びつくのかという有名な問いよりも、そもそも私たち人間のあり方においてどこまでが身体的でどこからが精神的と言えるのかという問いである。動物⇨機械説は、「自然種／神」の差異に基づいて人間における身体／精神という所与の差異を表現したのではなく、むしろ当の差異を創出し、強化することによって、後者の問いから人々の注意を逸らし、前者の問いを前景化させてきたのである。

(注) トーテムズム……：社会が種々の集団に分かれていて、ある集団が特定の種の動植物あるいは他の事物と特殊な関係があるとする信仰。

アイデア……：個々の事物をそのものたらしめている根拠である真の实在。

問一 傍線部 a・b にあたる漢字を含むものをそれぞれ次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

傍線部 a イ 共メイ □ 低メイ ハ メイ誉 ニ 感メイ ホ メイ運
傍線部 b イ シユウ憤 □ シユウ労 ハ 税シユウ ニ シユウ教 ホ シユウ復

問二 空欄 A・B・C にそれぞれあてはまる記述として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 動物⇕機械⇕人間 □ 動物⇕機械⇕人間 ハ 人間⇕動物⇕機械
ニ 機械⇕人間⇕動物 ホ 人間⇕機械⇕動物

問三 傍線部 1「外部から与えられた規則に従ってふるまう」という点で動物と機械の同質性が指定され」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 機械とは本来、人間が動物とは異なるということの証として作られたものであり、神という外部から見た時に同じ範疇に入るといふこと。
□ 人間は外部からの影響を受けやすい存在であり、本能的な動物としての側面と有機的な機械としての側面がともに作動するといふこと。
ハ 外部からの規制とは重力のようなものであり、地球上に存在する限り、動物も機械もその影響から脱することは不可能であるといふこと。
ニ 動物は人間の指示に関わりなく、本性や本能によって自由自在に動きまわり、機械もまた人間の関与がなくても自動的に動くといふこと。
ホ 機械も動物も、客観的な法則に基づいて作動する存在であり、固有の靈魂や欲望を持って自律的に作動する存在ではないといふこと。

問四 傍線部 2「比較を行う主体としての私たち人間が比較される客体でもある」といふ再帰性において特徴づけられる」とあるが、それはどういふことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、比較の対象になっているので、その分析を行う人間の考え方が否応なく結果に反映されたものになるといふこと。
□ 動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、元来、動物から進化し、機械を創出した存在なので、前提として一定の優位を占めることができるといふこと。
ハ 動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、あらゆる知的活動の拠点となるので、機械や動物について考える時にはまず、人間の思考に戻るといふこと。
ニ 動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、神を想像の中で創り出したので、神や動物や機械の造物主と捉える思考を問い直すことから始めるべきだといふこと。
ホ 動物・人間・機械の位置付けに関して比較検討する人間そのものが、理性を失えば動物や機械へと変容する可能性を秘めているという前提を理解した上で、議論を進めるべきだといふこと。

問五 空欄

D

E

に入る語句の組み合わせとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 相同的／対比的
- ロ 根源的／遡及的
- ハ 外在的／内在的
- ニ 近代的／古典的
- ホ 有機的／無機的

問六

傍線部3「分析されるもの（自然）に分析するもの（人間）が誤って投影された、客観的でない主張」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人間から見た自然というのは、人間本位の一方的な価値観に基づくものであり、自然から発信されている多様なメッセージに対応しきれないということ。
- ロ 自然と人間との関係は、人間の側から分析を試みることしかできないという限界を内包しており、両者を比較検討する視座を設定することが重要であるということ。
- ハ 人間は思考の根底に対象を擬人化して捉えるという習性を備えており、そうして人の特性や活動になぞらえられた自然は、本来の機能を過小評価されるということ。

- ニ 自然界の現象にはそれぞれ自律した意図や目的があるという考え方は、それに向き合う人間が自らの感情や思考をそれらにあてはめているにすぎないということ。

ホ 人間は本来、自然の一部であるという謙虚な姿勢を欠いた分析は、自然を捉える際に人間が自然界に及ぼしている影響を見落とすという問題を内包しているということ。

問七 空欄

F

（二箇所）に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 帽子や手袋
- ロ 馬車や牛車
- ハ 稲作や焼畑
- ニ 斧や梃子
- ホ 望遠鏡や虫眼鏡

問八

傍線部4「アリストテレスの目的論的な生命理解」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 人間は動物の一部ではあるが、自らの意志をもって生きているのであり、自然界における相互作用から超越しているということ。

ロ 自然界に生息するものにはそれぞれ靈魂があつて、固有の目的の実現を目指すのであり、人間の支配下にはないということ。

ハ 自然界の生物を、人間が創り出した機械と混同するのは意味がないことであり、その本来の生態に負荷をかけるべきでないということ。

ニ デカルトは生物に生存の目的意識はないとしたが、アリストテレスは人間のみが生きる意味を問い直すとしたこと。

ホ 自然界の現象は、人間の認識によって擬人化され、あたかも人間がそうした現象に影響力を及ぼし得るかのよう捉えること。

問九 傍線部5「理論上の「生命の機械化」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 動物や人間身体は固有の目的や靈魂を有する存在ではないので、それらは所有され、分析・利用されてもよいという捉え方。

ロ 神による自然の制作という概念を導入することにより、自然の中の存在同士が連携しあつて機械のように作動するという捉え方。

ハ 生命そのものを一つのアイデアと想定する思考が、その集合体として神の存在を機械的に実証する可能性を持つという捉え方。

ニ 自然界での生命の循環には、それを認識する人間が不可欠であり、神の視点から見ると人間の存在こそが自然を機械化するという捉え方。

ホ 神を目的因として想定するアリストテレスの思想においては、人間の精神もそれによって動かされている機械と変わらないという捉え方。

問十 傍線部6「不可視化されてきた」とあるが、何が不可視化されたのか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 文化や社会を創り出してきた人間自体が、自然界に溶け込むことによって純化されたということ。

ロ 機械に生命を吹き込むのは人間のみに与えられた役割であり、人間は自然界から超越した存在であるということ。

ハ 現実の世界は、現象としての生命と物質としての機械とのせめぎ合いによって成立しているということ。

ニ 自然のうちにある合目的性を尊重することによって、人間が自然の主人にして所有者となるということ。

ホ 自然物と機械とを比較する主体である人間自体が、比較対象である自然界の一存在であるということ。

問十一 傍線部7「機械論哲学は近代社会における「機械のトーチカ」を確立する基盤となったのである」とあるが、それはどういうことか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 自然や生物を扱う際に、それらが自律的に活動する事実を認め、そのメカニズムに客観的な法則性を見出す機械論哲学は、近代社会においてかつては信仰の対象であつた自然や生物の固有の目的と靈魂を疑問視する科学的な思考を備えているということ。

ロ 自然や生物を扱う際に、それらが有機的に組織化された全体を重視し、分節化することが不可能であると捉える機械論哲学は、近代社会において人間が大規模に推進した自然破壊が、機械化による弊害の最たるものであるという信念を持つに至つたということ。

ハ 自然や生物を扱う際に、それらを計量可能な現象と見なし、人間による自然界の制御の方法を探究する機械論哲学は、近代社会において機械こそが自然や生物を理想化した存在であり、人間もまた理想化された自然の一部であるという確信を得たということ。

ニ 自然や生物を扱う際に、それらの有限性や同一性を説明するためにはすべてを数値化しなければならないとする機械論哲学は、近代社会において機械と人間のあいだに捉えどころのない特定の関係があるという考え方の起点になったということ。

ホ 自然や生物を扱う際に、それらを二元論的に分節し、また人間を身体と精神とに二元論的に分節することで自然界と人間の相同性を仮設した機械論哲学は、近代社会において有機体と機械を類比的に捉えることによって自然の利用を正当化するということ。

問十二 この文章の内容に合致するものを次の中から二つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 人間的領域を身体と精神に区分することによって、手段的に利用可能な部分が創出され、近代的思考が発展する契機となった。
- ロ 自然界には人知の及ばない領域があり、近代以前の社会では、その解明の過程で「神」という存在が創出された。
- ハ トーテム信仰のある世界では、人間の能力の延長として機械が作られることは、「神」を模した行為として戒められていた。
- ニ 人間精神の基盤は自然界で形成されるものであり、そのため人間は自然を支配するのではなく、共生を試みる義務がある。
- ホ 筆者の考えるデカルトの機械論哲学は、アリストテレス自然学とは対照的に、自然界を客観的に分析する存在として人間を位置づける。
- ヘ 人間は、自身に関してどこまでが身体でどこからが精神かといった根源的な問いに明快な解答を出せているわけではない。
- ト アリストテレス自然学で述べられている「動物・人間・機械」についての考察は、近代における科学技術の進歩に貢献した。

(二) 次のA・B二つの文章を読んで、あとの問いに答えよ。なお、Bの文章には、設問の都合上、返り点・送り仮名を省いたところがある。

A そのころ、吉野の山に籠り給へる優婆塞の致仕の大臣おはす。故入道大臣の御はらから、今の左大臣殿よりはこのかみにおはす。故入道大臣の御後は、世の御後見し給ふべかりけるを、今の殿にゆづりきこえ給ひけるゆゑに、世を怨みて籠り給へるなり。今は七十路に及び給ふまで御髪みげの雪は変はらず、世に経る方かしこく、財の山を御垣のうちに築き置き給ひて、世人もその方をめでたてまつるに、姫君三人おはするを引き続き、この三月のころ、かしこの花のさかりを見捨てて都に帰り給へるが、関白殿へ、

身の憂きに吉野の山に入りしかど思ひ残らず帰り来にけり
殿いとあはれにめづらしう思しつづ、

世を憂しと入りにし山を帰りなばやがて

A なるべし

この人世を怨むる心深くてかく行なひ過ぐす事、亡き御ためも、わが御末々も、よからぬ事なりと思して、帝にも奏し申し給ひて、しばしがほどにても名をかけせんと申し寄る。

この殿へわたり給へり。中納言中将・三位中将・大將はさらなり、みな集ひ給へる御中に、まことに御髪びんのあたり・御髭ひげ、みな白妙しろたへに雪をふくみて、神さびたるものから、さすがによしありらうらうじくて、目尻ぞ少し癖々しからんと見え給ふ。まづ住み来し山の有様、雪の深さ、この十六年がほど行なひつる有様、「真言の秘密残らず、灌頂くわんじやうも三度つかまつりて」など、人には物も言はず、息苦しげに引きつづのたまふさま、をこびたり。からうじて隙ある折、御慶びのよし灰めかしのたまひ出でたるに、思し喜びたるさま、いみじうあはれなり。

もと住み給ひし七条堀川を、上らんの御心つきけるにや、去年の秋ごろより磨きつくろひたるに、住み給ふ。ほどなく右大臣に返りなり給ひて、関白の宣旨せんじあり。御慶び申し給ふも、大臣とりもちて沙汰しきこえ給ふを、世の人のみじく感じたてまつる。雲の上にては、臆し給へりけるにや、さのみ御口もえきかず、拝したてまつり給ふほどの苦しげさを、若き内侍どもはほほゑみけり。上御対面ありて、あはれと御覽ず。明王の時待ちて出でける商山の四皓しごなどはかくやありけんと思えたる御さまなり。

(「恋路ゆかしき大將」による)

B この文章には、Aの文章中の二重傍線部「商山の四皓」が登場する。漢の高祖は晩年、呂夫人が生んだ皇太子を廃して、戚夫人の子を新たな皇太子に立てようとした。呂夫人は危機感を覚え、建国の功臣、張良(留侯)に策を求めた。張良は高祖がかつて側近に迎え入れようとしてできなかった四人の賢者(商山の四皓)を使って、高祖の心を変えさせる策を授けた。この一節は、張良の策が実行に移され、「四皓」が高祖に面会した場面である。

漢十二年、上從下擊破黥布軍、歸上疾益甚、愈欲易太子。
留侯諫、不聽、因疾不視事。叔孫太傅稱說引古今、以死爭太子。上詳許之、猶欲易之。及燕置酒、太子侍。四人從太子、年皆八十有余、鬚眉皓白、衣冠甚偉。上怪之、問曰、「彼何為者」。四人前對、各言一名姓。上乃大驚曰、「吾求公數歲、公辟逃我。今公何自從吾兒游乎」。四人皆曰、「陛下輕士善罵。臣等義不受辱、故恐而亡匿。竊聞太子為人仁孝、恭敬愛士、天下莫不延頸欲為太子死者、故臣等來耳」。

(「史記」留侯世家による)

(注) 上……漢の高祖劉邦を指す。

黥布……漢の高祖劉邦が項羽を破るのを助けた武将の一人。漢の統一後、劉邦に対し謀反を起こしたが、失敗し殺された。

留侯……張良のこと。

叔孫太傅……側近の一人、叔孫通のこと。「太傅」は、皇太子の守り役。

詳……ここでは、本音を隠して認めた振りをすること。

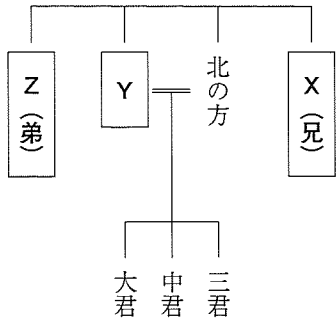
燕……宴会を開く。

鬚眉皓白……あごひげと眉が真っ白いこと。

問十三 左の系図の空欄 X(兄)・Y・Z(弟) にあてはまる人物の組み合わせとして最も適切なものを

を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ X 今の左大臣 Y 故入道大臣 Z 致仕の大臣
- ロ X 故入道大臣 Y 今の左大臣 Z 致仕の大臣
- ハ X 今の左大臣 Y 致仕の大臣 Z 故入道大臣
- ニ X 致仕の大臣 Y 今の左大臣 Z 故入道大臣
- ホ X 故入道大臣 Y 致仕の大臣 Z 今の左大臣
- ヘ X 致仕の大臣 Y 故入道大臣 Z 今の左大臣



問十四 誰が、なぜ、山にこもったのか。誰がにあたる人物として最も適切なものを(①)と、なぜにあたる理由として

最も適切なものを(②)を、それぞれ、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

① 人物

- イ 致仕の大臣 ロ 故入道大臣 ハ 今の左大臣 ニ 中納言中将 ホ 三位中将

② 理由

- イ 年取ってから生まれた姫君三人の世話をするため。
- ロ 七十歳になり、仏道への思いが募ったから。
- ハ 故入道大臣が地位を今の左大臣に譲ったから。
- ニ 財宝も貯まり、特に欲もなくなったから。
- ホ 妻が亡くなり、世の中を憂きものと思ったから。

問十五 空欄 A に入る語句として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ たのしき悟り
- ロ 苦しき道と
- ハ きびしき吉野
- ニ 怨むる時と
- ホ うれしき榮え

問十六 傍線部1「しばしがほどにても名をかけません」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ しばらくの間だけでも、姫君三人の世話をしよう。
- ロ しばらくの間だけでも、仏道修行をさせよう。
- ハ しばらくの間だけでも、都を楽しませよう。
- ニ しばらくの間だけでも、関白にさせよう。
- ホ しばらくの間だけでも、よい若者を集めよう。

問十七 傍線部2「をこびたり」の意味として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 苦しげである。
- ロ 滑稽である。
- ハ 神さびている。
- ニ すばらしい様である。
- ホ ふざけている。

問十八 傍線部3「あはれなり」の「なり」と文法的に同じ「なり」を、問題文の波線部イ、ホから一つ選び、解答欄にマークせよ。

問十九 傍線部4「雲の上にては、臆し給へりけるにや、さのみ御口もえきかず」の内容として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 致仕の大臣は、関白になったものの、緊張するのか、さほど口もきけない。
- ロ 故入道大臣は、関白になったばかりのとき、気後れしてしまい、さほど口もきかなかつた。
- ハ 今の左大臣は、関白になったので、周囲は臆してしまったのか、さほど口もきかない。
- ニ 大将は、若くして関白になったので、緊張して、さほど口もきけない。
- ホ 若き内侍どもは、宮中では気後れしてしまい、さほど口もきけない。

問二十 波線部a「疾」は、二度用いられているが同じ意味である。それと同じ意味で用いられている「疾」を含む熟語を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 疾走 ロ 疾患 ハ 疾徐 ニ 疾風

問二十一 波線部b「易」は、二度用いられているが同じ意味である。それと同じ意味で用いられている「易」を含む熟語を、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 簡易 ロ 難易 ハ 軽易 ニ 交易

問二十二 傍線部5「彼何為者」の意味として最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 彼らはいったいいかなる者たちだ。
- ロ 彼らはなぜ皇太子に従っているのだ。
- ハ 彼らはいつどこからやって来たのだ。
- ニ 彼らは何の目的でここに呼ばれたのだ。
- ホ 彼らはなぜあのような格好をしているのだ。

問二十三 傍線部6「為人」の読みとして最も適切なものを、次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ ひととなせば
- ロ ひとををさむるに
- ハ ひとのために
- ニ ひとたりて
- ホ ひととなり

問二十四 傍線部7「天下莫不延頸欲為太子死者」は、「この世の誰もが首を長くして太子のために身命をささげたいと思っています」という大意である。この大意に沿う読み方として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 天下莫_レ不_レ延_レ頸_下欲_下為_二太子_一死_上者_上
- ロ 天下莫_レ不_レ延_レ頸_中欲_中為_二太子_一死_上者
- ハ 天下莫_レ不_レ延_レ頸_中欲_中為_二太子_一死_上者_甲
- ニ 天下莫_レ不_レ延_レ頸_中欲_中為_二太子_一死_上者_甲
- ホ 天下莫_レ不_レ延_レ頸_下欲_下為_二太子_一死_上者_甲

問二十五 漢の高祖は最終的に皇太子を廃することを思い止まった。それでは、張良の策略とは、はたしてどのようなものであっただろうか。次の中から最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 高祖が尊敬してやまない四人の賢者に、招聘を拒絶した真の理由を語らせて、高祖に己の人格的欠点を理解させ、皇太子を廃することがその傲慢さによるものであることを悟らせて、翻意を促すというもの。
- ロ 高祖がかつて招聘しようとしてできなかった四人の賢者を呼び寄せ、彼らに高祖に対する世俗の悪評を語らせるとともに、今の皇太子を廃することがどれほど非道なのかを説かせて、翻意を促すというもの。
- ハ かつて招き寄せようとして拒絶された四人の賢者と高祖とを自然に引き合わせ、病状が悪化して弱気になっている高祖の心の隙間をねらって、賢者の高潔な人柄と考えに触れさせることで、翻意を促すというもの。
- ニ 高祖に、己の不徳ゆえに招き寄せることのできなかった四人の賢者が皇太子にうやうやしく付きしたがっている様を見せつけ、さらに賢者の口から皇太子の人望の厚さを説かせて、翻意を促すというもの。
- ホ 反乱軍鎮圧の疲労と体調の悪化により、ますます専横を強める高祖に対し、慎重の上にも慎重を重ねて、彼が全幅の信頼を置く四人の賢者を登場させ、彼らに腰を低くして説得させ、翻意を促すというもの。

〔以下余白〕